

大島塾新聞

ムロノキ
新聞社

第15号

広告



五島列島釣行記

二〇一九秋の五島釣行記

令和元年十一月十六日(土)下げの中潮

満潮午前十時、干潮午後四時

「もういづく寝るといふ魚釣り」。もう釣行記を書き始めてしまった今日は出発前のまだ月曜日。釣り餌と食糧以外はもうほとんど支度を終えてしまった。歳をとるといふところがえ性がなくせつかちになるのは仕方ないのだ。五歳の女の子が仕切るNHKのうんちく番組によれば、衝動を抑えるべき前頭葉機能は三十歳くらいをピークに年々低下する。なのでオヤジ世代は思いつ

くまま恥ずかしげもなくつまらぬギヤグを連発するようになるのだそうだ。番組によると筆者の前頭葉はもはや小学五年生レベルらしい。

向根や谷川の勧めもあって筆者もこの度ついにテントを買った。最大の理由

は前回仲間が寝ている間にヒルに食いつかれ、寝起きに臉を大きく腫らしていたのを見てしまったことにある。潮騒を聞きながら安らかな眠りにつけるのであれば多少の出費は安いもの。ついでに小さなトランジスタラジオを買った。五島の夜、音楽を聴きながらウイスキーのオンザロックでも飲もうか、オーパの開高健をきどつて…。さてそう上手い具合にことは運びますやら。

今回は宇田さん、向根、谷川と筆者の四人旅。前日は昼過ぎに出発し夜七時には佐世保に到着した。前回紙面を賑わせた若衆たちだが、R2は米子、P2は神戸にそれぞれ転動していった。ほかのメンバーも秋はいろんな行事があつてなかなか足並み揃わずさびしいが、予報では好天にも恵まれそうで心は踊っていた。

「井出ちゃんぽん」白岳店で夕食を済ませ、かめやで最終備品を調達。いつものようにばらもん二階ではお心遣

いの焼酎をいただいた。ひとしきりの雑談の後、四人だけの記念撮影を行い十一時過ぎには床に就いた。



生きくらげ、卵入り特製井出ちゃんぽん



目覚めれば天気予報通りの快晴で、七時に出船。風の五島灘をすべるように走る船のデッキはとても心地よかつた。予定通り宇田さんと向根は福祉の波止、谷川と筆者はハダカ瀬に上礁して二〇一九年秋の五島六島の釣りは幕を開けた。

まだ満ち潮の残るハダカ瀬、前半

筆者は沖目のウキ下十斤の深場を探った。釣りを始めて間もなく、撒き餌を投げる右肘に痛みが走った。そういえば一週間ほど前から肘に違和感があつたのだ。時とともに痛みは強くなり、まるで女の子がボールを投げるような情けない格好になってきた。このままだとタマツメ、本命尾長グレの時合まで保ちそうにない。危機感を感じた筆者は早々に切り上げ、もう一つのお楽しみだったテントを設営し夕方まで肘を休めることにした。アウトドアマスターの谷川の指導ですぐに仮設住宅は完成した。マットを敷いて、釣りバッグをテーブルにすると内装も完成。メッシュの窓からは野崎島を望むオーシャンビュー、それに冷えた缶ビール。一日限りのマイホームは快適至極。



一方谷川は事前に練り上げた綿密なタイムテーブルに従い、到着早々「一時間半で戻ります」とルアーロッドを手で千畳敷に向かった。定刻に戻ってきた彼は手ぶらであったが、表情にはまだ余裕があった。その後ハダカ瀬表磯でカゴ釣りを始めたがここでも釣果が出ない。

午後になり筆者がワンド側をのぞいてみると小魚を追うヒラマサを発見。こんな時のためにダメもとでと一個だけ買ってきた四〇グラのメタルジグを迷わず投入した。すると少し離れたところでもまたバシヤリ。投げ直そうとすぐ巻き取り始めたら「ん？なんか重い」。ひとしきりやりとりして上がってきたのは六〇センチの真鯛だった。一投目まさかの交通事故的な…。その後二匹目のドジョウは来なかった。夕暮れ前からは昨年と同じようにいたるところでヒラマサのボイルが始まった。ルアーマン谷川、ここが勝負と一心不乱にメタルジグ、シンキングミノーなど打ち込むがヒットしてこない。ここにきてさすがに焦りの色がにじんできた。



福祉の波止

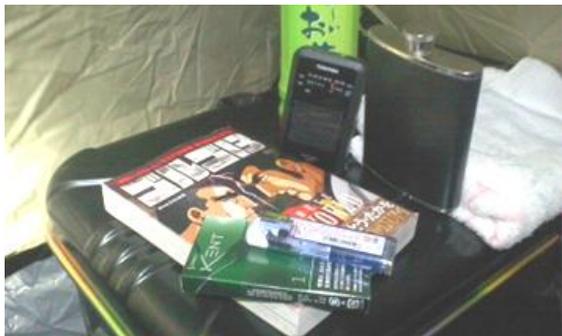
こちらの方は二人とも早くからカゴ釣りを始めていて時折竿を曲げているのが見えた。たまにタモを伸ばしたりしているのが結構釣っているなと思っていたが、帰りに彼らのクーラーを覗くと

各々四〇センチ後半の大型を含む良型クチブトグレを七、八尾、宇田さんは五〇センチオーバーの真鯛も釣っていた。聞けば到着直後には大型グレが波止に群れており、少しするとヒラマサが足下、湾内までいたるところでボイルしまくっていたそう。ベイトがシラスのような小魚だったため彼らのルアーにもヒラマサがヒットしてくることはなかった。こんな時、重安や古谷はどう戦うのだろうか。来年の秋にはぜひ御教示いただきたいのである。



ハダカ瀬の後半

タマヅメのゴールデンタイム、あるにはあったがとても短かく二〇分くらいで魚の気配は消えた。目標四〇センチオーバーグレ十尾には遠く及ばず尾長一尾、クチブト三尾に終わった。肘の痛みは回復せず夜釣りは断念したが、夜のテント生活は昼間以上に楽しかった。メッシュの窓越しに向根のウキの赤い光が流れ、ラジオからはプレミア⑩の野球中継、日韓の接戦が流れてくる。LEDラントンは思いの外明るくウイスキーを飲みながらゴルゴ13を読んだ。テントに「禁煙」シールを張り付け思いつき煙草を吸ってやっただ。どうだい、ハードボイルドだろうか？



ラジオ、ウイスキー、煙草にゴルゴ

この時谷川はカゴ仕掛けを振り続けていた。きつと職場の仲間への土産を約束していたのだろう。三〇〇〜三十五センチのイサキを数釣り上げた。イサキ、はじめはともうれいのだが群れるとこればかりが喰ってくる。仕掛けがなじむ前に次から次に当たってくるのでだんだん心が萎えてくる。十一時過ぎに彼のテントの明かりが消えた。だがこのままでは終わらなかつた。翌朝夜明け前から再度カゴ釣りに挑み良型のグレ数尾を追加した。中の一枚、四〇センチ尾長は「木村さんに届けてください」と、この男はどこまでも優しい。今回彼が練り上げてきたアコウ、ヒラマサ狙いの秘策の数々は不発に終わってしまったが、「ハダカ瀬のワンド側には開拓の余地がある！」と早くも次への策を練り始めたようだ。

朝は早々に帰り支度をした筆者だったが、もう一つ、二六グラのジグヘッドとワームを持ってきていた。赤紫ラメ入りのくねくね尻をふるエロイワーム。せっかく持ってきたのだから迎えの船が来るまでのいつ時と投げてみたら、これまた一投目に三九センチのアカハタが釣れた。ルアー素人無欲の釣果？これをみて谷川、さすがにがっかり感を隠せずぼつりつぶ

来た魚影はでかい鯛でした。地獄から天国でした。五島の夜は色々あります。ミサイル撃ち込んだ僕にこんなプレゼントがあるなんて、不思議な夜でした。まだまだ不思議な話がありますが、また次の機会に報告します



釣りと私 木村 清治

まず、この場を借りて谷川先生にお礼を述べさせていただきます。全体で2匹しか釣れなかった貴重な尾長グレをいただき有難うございました。大変美味しかったです。

初めて釣り竿を握ったのは6歳くらいだったと思うが、近所の大きな池でミミズやパンの切れ端を餌に竹の延べ竿を握りしめワクワクしながら糸を垂らしていたのを記憶している。釣れるのは小さなフナやウグイだったが少年の高揚感を煽るには十分な獲物であった。

ある時父親が船に乗って釣りに行くという話を聞き、一緒に行きたいと嘆願したところ許しを貰えたのだが目が覚めると既に出発した後で、思えば体よく寝かしつけられたのだろうが残念で仕方がなかったことを今でも覚えている。

2か月位前になるが、休日に家族を釣りに誘ってみたところ興味を持ってくれたので周防大島へ出かけてみた。ゴカイを餌にシロギスを狙ってみたところ投げる毎に何かしら釣れてくるため大喜びで、今では家族が皆釣り好きになっている。

子供のころ池へ向かって糸を垂らしていたワクワク感は、いい歳をとった今になっても少しも色あせることはなく、近年覚えたイカ釣りが面白くて夢中になったりしている。

今回は五島行きに参加できなかったが不思議と残念な気持ちは無く、皆の釣況を聞くことや次回釣行に思いを馳せることが楽しみで仕方が無い。少年時代から今に至るまで人生から切り離すことができないほど釣りに不思議な魅力がある。



Gallery



まだ名前はない



彼岸ふぐ

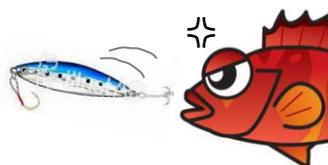
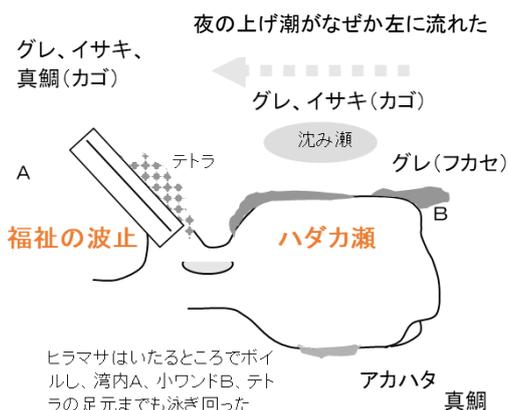


宇田さんのお守り、開運!



向根のクーラー、グレ、イサキにアカハタ

今回の主な釣魚とヒットポイント



平戸西沖の上阿値賀(左)・下阿値賀島

